

## 故人の夢

院長 長山 直弘



当院で亡くなられた方のご家族が何か月か経って入院中のお礼にみえることがあります。この頃は認知症高齢者の死亡が多いのですが、故人になられたその方たちに関する夢について話されることがあります。

一例を呈示します。

・60歳からパーキンソン病を患った男性はそのうちレビー小体型認知症も患われることになり、意識レベルの低下・嚥下機能の低下が進み、約10年後に誤嚥性肺炎で亡くなられました。亡くなられた4か月後に奥様が言われました。

「よく夫の夢を見る。ニコニコして出てくる。定年前の頃の姿で。夫が人生で一番充実していたのは定年前の55歳頃だと思う。その頃仲人もやった。その時の写真を葬儀の写真として使ってくれと言っていた」

何人もの話をまとめると認知症であった故人に関する夢には次のような特徴があることが分かります。

1. 認知症を患っていた故人が認知症の状態で見れることはなく、認知症状がなかった頃の姿で見れる。
2. 親しかった故人が夢に見れる際には、生前その人が人生の中で一番満足していた、あるいは最も（特に内面的に）活躍していた時期の姿で見れることが多い。

これらのことからどんなことが考えられるでしょうか。色々な説明があり得ると思いますが、字数の関係で最も単純な考えだけを述べたいと思います。それは魂や霊的世界の存在を肯定することです。霊的世界の存在を前提とすると、故人に関する夢から次のことが分かります。

第一に霊的世界とこの世とは夢という形式ではつながり易いということです。これは故人に関する夢が霊的世界を探求する一つの足がかりになり得ることを示します。第二に生前の認知症は死後には霊（魂）に及んでいません。つまり認知症は死ねば治るということです。多分このことは他の病気についても言えることでしょう。第三に霊界があるとすればそこでは生前本人がもっとも気に入っていた年代の姿をとる、ということです。

こう考えると病老死は怖くない、という気がしてきます。